

スーパーマジック大戦 ～最後の希望～

くずたまご

注意事項

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

あらすじ

仮面ライダーウィザード “操真晴人” は、ファントム残党との戦いの途中、謎の魔方阵により転移させられてしまう。謎の世界に飛ばされた晴人を待ち受けていたもの……それは強大な敵と、世界の危機、そして “魔法使いたち” であった。

果たして彼らに、世界の危機を救う事ができるのか!?

※投稿日

目次

予告

1

予告

灰色にひび割れた鎧。全身に走った幾本もの血線。頭部には凹凸のない覆面のよう
な人相と、二双の角。

とても人とは言えぬ悍ましい化け物の名は『グール』。彼らにまともな思考能力はな
い。主の命令に従い破壊を撒き散らすだけだ。彼らの標的にされた人に希望はない。
絶望の淵に追い落とされるまで、彼らにその心身を弄られるだけである。

その恐ろしい怪物が十数体。たった一人の標的を取り囲んでいた。
誰もが絶望する状況——ただし、それはただ“人”の場合だけだ。

「さあ、ショータイムだ」

余裕さえ感じる声音で告げたのは、宝石を象った赤い仮面の男。彼は魔法使いを連想
させる黒のマントを靡かせ、悠然と左手の指輪を小さく掲げる。

彼こそが“指輪の魔法使い・仮面ライダーウィザード”。絶望に追い落とす存在が
グールならば、ウィザードは絶望から救い出す最後の希望。グールとは対を成す存在で

あった。

「それじゃあ、さつきと『ファントム』にお出まししてもらおうか」

『ファントム』とは人間が絶望する事により生まれる化け物だ。ウイザードと仲間の魔法使いたちの尽力により、彼らファントムの首領は倒された。しかし、彼らは全てが滅ぼされた訳ではなく、このように散発的にグールを産み出し、街を襲っていた。ウイザードは人が絶望し、再びファントムが生まれない様に、戦い続けていたのだ。

グールを幾ら倒しても、絶望の根源は断てない。彼らを倒して、親玉であるファントムを炙り出さなければならなかった。

ウイザードはグールが動き出す前に、一点に向かって駆け出す。グールはその手に持った槍で迎撃するが、それは決してウイザードを捉える事は出来ず空を斬る。

ウイザードはまるで舞うかのように、槍を躲し蹴りを放っていた。そこに荒々しさはない。澱みなく流れる嵐脚は流麗であり繊細であった。しかし決して弱い訳ではなく、むしろ力強く敵を刈り取っていく。

「フィナーレだ」

大方のグールが傷つき倒れ伏した所で、ウイザードは手形の文様が描かれたベルト——ウイザードドライバー——を操作してから、一つの指輪を右手中指に付け、右手をベルトに重ねる。

『チョーイイネ！ キックストライク！ サイコー！』

と、音声が鳴ると同時に、赤色の魔方陣が地面に浮かび上がる。ウイザードはマントを鋭くはためかせ一回転。傲然と構えると、その右足には魔力が凝縮されていき、一塊の炎が生まれた。

魔力が霧散しないよう、細心の注意を払いながら、しかし大胆にウイザードは跳躍に入る。

「はあああつ——!!」

うねり声を上げなら、ロンダートで助走を一つ。着地と同時に地面を大きく踏み切ると、中空高く飛びあがり、グールに向かい回転、加速——。

そして、

「だあああつ!!」

途上のグールを薙ぎ払いながらワイザード。向かう先は、倒れ伏したグールたちの中心地点。着地と同時に、熱波でグールを文字通り粉碎する——そのはずだった。

「なっ!?!」

ワイザードが驚きの声を上げる。彼の向かう着地点の中途、そこに見た事の魔法陣が浮かび上がっていたのだ。彼の直感が、あれに触れてはならないと訴えかける。しかし、加速度的に上がるキックストライクを止める事は、如何にワイザードでも無理だった。

高速のワイザードが魔法陣が突撃する。しかし、起こるはずの爆発が起きない。

黒い魔方陣が消失する。残ったのは、ダメージを負ったグールのみ。そこにワイザードの姿はない。

それもそのはず、ワイザードは魔法陣を突き破ったのではなく——全身を魔方陣に飲

み込まれていたのだ。

こうして、仮面ライダーウイザード——そうまはると繰真晴人——はこの世界から消え失せ、世界を巻き込んだ大戦へと巻き込まれるのであった。

○

「ここ、どこか知ってる?」

「私の知らない場所なのは確かね」

それは幾多の世界を巻き込んだ、恐ろしき実験。

「俺は繰真晴人。君は?」

「パチュリー・ノーレッジ……って、吾気に自己紹介している暇もないみたい」

襲い掛かる数多の強敵たち。

次第に追いつめられていく彼らを助けたのは、意外な人物であった。

「私の名前はバマミ。信じられないかもしれませんが、魔法少女です。それでこちらの方は、」

「兄さん、いい根性だ!! 気に入った!!」

戦いを通して明かされていく、悍ましい計画の正体。

「私は霧雨^{きりさめまりさ}魔理沙。何となく、お前とは気が合いそうだ」

「う、うん。よろしくね、魔理沙ちゃん」

今ここに、魔法を掌る者たちが集う（一名除く）。

「はああ……やつぱり、ガツシユ君って可愛い」

「ぬおおおっ!! や、やめるのだ、フェイト〜!!」

数多の世界の危機。

彼らは世界を守るために、力を合わせ戦う。

「削板さん、一緒に必殺技を考えませんか？」

「ん？ 俺にはすごいパンチが——」

「駄目です。名前に根性がありません」

「!？」

降りかかる敵の謀略の数々。

「ぶりいいいいっ!!」

「ガツシュ君!?! ブリは空を飛ばないよ!?!」

しかし、結束した彼らを止める事は叶わない。

「マスタースパーク！」

「デイバインバスター！」

「ティロ・ファイナーレ！」

「プラズマスマツシャー！」

「オーバーキルだから、もうやめなさいよ!」

困難を乗り越え、生まれる絆。

「晴人……私……」

「パチュリー……」

「こんな灰汁の強すぎる面子の引率なんて、もう無理……」

「はい、胃薬」

迫る来るカウントダウン（パチュリーの寿命的な何か）と現れる過去の敵。

「これはファワード!? なぜ、ここにある!?!」

「知っているの、ガツシユ君!」

「……うぬ! でっかい魔物なのだ!」

「……………」

そして、明かされる過酷な真実。

「ソウルジェムが魔女を産むなら……私、死ぬしかないじゃない!」

「大丈夫。俺が最後の希、」

「マミなら根性で乗り越えられる!!」

「!?!」

魔法と絆が合わさる時、新たな力が生まれる。

「パチュリー、この指輪は……」

「私からのプレゼント。これで晴人は七曜の魔法使いね」

「……サンキュ」

「なのは! ミニ八卦炉とレイジングハートの出力を合わせるぜ!」

「うん! 細かな調整はレイジングハートに任せて! それじゃあ、行くよ!」

「ガツシュ君……私の魔力を、受け取って……これで、あいつを……」

「……これが、フェイトと私の、バオウの力だ!!」

「削板さん。私たち……合体技がないわ」

「そんなもの根性で、」

「どうにもならないわ。だって、あなたの魔法じゃないもの」
「!？」

彼らの戦いの先に待ち受けているものとは――。

「俺が……俺たちが最後の希望だ！」

スーパーマジック大戦〜最後の希望〜

——3014年夏公開予定。